

教 仏 庵 草

第194号
(発行日)

2006年8月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mailadress : bachkantata2mubansou

@zeus.eonet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○真宗共学会――毎月第一と第三木曜日午後7時より。

*8月22日同朋の会および8月12日念仏座談会は休みます

真宗問答(二十五) 第十八願その三

D 「阿弥陀仏が私たちに願いをかけて働きかけてくださっている、その働きを如来の本願力ともうします。これは「真実とは何か」という人類の問いに対する答えといえましょう。この願いを仏説無量寿経に四十八願として釈尊がお説きになつていますが、その中で第十八願が要(かなめ)です。この第十八願には、念仏往生の誓いが阿弥陀仏によつて誓われていて、一切衆生を救うという大悲の思し召しが表されていることを前回まで詳しく述べてまいりました。ところが親鸞聖人はこの第十八願を(念仏往生の願)と見られつつ、さらに(至心信樂の願)というお心があると仰せられています」

A 「第十八願はたとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、至心信樂して、わが国に生ぜんと欲ひて、乃至十念せん、もし生ぜずは、正覚を取らじ。ただ五逆と誹謗正法とをば除く。」
(たとえ私が仏になりえたとしても、十方の世界にあつて、さまざまな悩みをいだきつつ生きるすべてのものが、念仏の誓いとうそいつわりのないことを(至心)疑いなく信じて(信樂)わが国に生まれることができるとおもいさだめ(欲生我國)、たとえわずか十遍であつても、念仏もうしているのに、もし浄土に生まれることができないようなら、私は正しくめざめたもの(阿弥陀仏)にはなりません。ただ五逆の罪を造つて恥じず、仏法を否定しつづけるようなものは、このかぎりではない)です。この願をまた聖人が至心信樂の願といわれた、それはどういう意味ですか」

D 「至心信樂とは真実の信心とすること、至心信樂の願は、阿弥陀仏が衆生に念仏の誓いを信ぜしめて救おうして起こされた誓願であるとの意でありましょう。阿弥陀仏は私どもに、念仏の誓いをまこと(至心)と信ずるものを(信樂)、かならず救うと誓われたのです。それを宗祖はわがちかひを信じるもの、もし生まれずは仏に成らじとなりとお示し(左訓)です。それは私たちに念仏の信心を成就せしめて救おうとの願いからであります。その意味から十八願を聖人は至心信樂の願と仰せられるのでありましょう」

A 「なぜ聖人は第十八願は念仏往生の願という念仏の願でありつつ至心信樂の願の意味があることを強調されるのでしょうか」
D 「これには深いわけがあります」
A 「どういうわけですか」
D 「実は法然聖人は第十八願に一切衆生を平等に浄土に往生せしめたもうお心があることを第十八願の中
乃至十念、若不生者、不取正覚(すなわち十念に至るまで、もし生まれずば正覚を取らじ)の文を中心に了解され、お念仏を人々にお勧めになりました。それによつて多くの人がお念仏を申すようになりました。ところが念仏は申すけれども、念仏のお心がいただけない人が多かつたわけです。その結果、念仏すれども浄土に往生することが定まらず、何時までも不安であったり感つたりし、なかには念仏しながら臨終の時に仏菩薩の来迎を祈る人たちもいました。念仏申せども、往生が決定しない、救いがハッキリしない、救いが実感できないという問題があつたのです。その問題に明確に答えられたのが親鸞聖人であつたといえましょう」
A 「念仏すれども救われたという確かなものがない、そうすると不安なままですよね。それはどこに問題があるのでしょうか」
D 「それは乃至十念、若不生者、不取正覚(我が名を称えるばかりで必ず救う)という真意がいただけないからです。この念仏往生の誓いを聞いて(念仏を称えるだけで阿弥陀様は救つてくださる)と、教えをつかんでしまうのです」
A 「教えをつかむというのは？」
D 「不可思議な仰せを自分の頭(分別)で受け取つて、(こうすればあなる)という風に原因結果の関係で受け取る、いわば合理化して受け取るうとするのです」
A 「念仏せよ、助ける」と仰せられるのだから、念仏を称えていこう、そうすれば阿弥陀仏は助けてくださる、というように受け取つてしまうことですよ」
D 「ええそうなんです。(我が名を称えよ、助ける)という場合の念仏は、人間の側に念仏行を積み重ねることを条件に救うとい

《 盂蘭盆会法要 》

8月10日(木)

午後2時始まり

*8月22日の「同朋の会」は休みます。

うことではないのです」

A 「ではどういってお心ですか」

D 「我が名を称えよ」というのは、(そのままなりでまるまる助ける) という阿弥陀仏の不可思議な絶対平等の救済を表されたお言葉なのです。この(タスケルで、我が名を称えよ)には無窮の大悲のお心があふれているのです。この大悲のお心を受け取らずに、(念仏称えたら救うといわれているから、それじゃあ念仏していきましよう) という風に受け取るのは、念仏という形だけを受け取って念仏に表されている大悲を受け取っていないのです」

A 「なるほど、形はつかんだけれども、その心は受け取っていないですね」

D 「ええ。妙好人の讃岐の庄松さんの話(『庄松ありのまま記』)に

『或る女が我が息子を、下関に奉公につかわしておいた、母真実をつくして、裕衣を早くこしらえて、よき便りに送りたれば、息子は裕衣ばかりを受け取って、母のまことを受けとらなんだということがある。是では情けない、弥陀の本願を疑いなく頼んだ喜びはよいが、如来の御真実、たしかに受け取ってよるこんで居られます哉と申候』とあります。母親が寒い下関に奉公にいつている息子にさぞ寒かろうと夜なべをして裕衣(あわせ)を作って送ってやる。とこ

ろが息子は、ああい物が来た」と裕衣を喜んだが、裕衣にこもっている母親が息子を思う愛情を受け取らなかつた、という話です。我が名を称えるばかりで助ける、という阿弥陀仏の仰せを聞いて、称えるだけで助かるとは、それは易いことだ、それじゃあ称えさえすればよい、楽なことだ、というのは下関の息子と同じ。念仏の行じ易さを喜んだが、称えるばかりで助けるという驚嘆しても余りある弥陀の大悲を受け取っていないのです」

A 「(乃至十念・若くは正覚)というのは大悲大悲を表現されたお言葉だったのですね」

D 「ええそうですね。私たちがどこどこまでも見捨てず、追っかけ、どんな者をも見放さず、助けよう、引き受けよう、浄土に生まれさせようと、徹底的にかかわりたもうのが撰取不捨の大悲です。それが私たちに乃至十念・若くは正覚(我が名を称えよ、必ず助ける)と喚びかけたもうのです」

A 「我が名を称えよというのは、絶対救済の大悲の喚びかけということですね。それほどの広大な慈悲を聞かずに、私たちがともすると念仏称えていけばいいのだというような、ただ行じ易い念仏ばかりを喜んで、弥陀の大悲をいただかないのですね」

D 「ええ、ですから、念仏にこもれる大悲大悲のお心を信受させていただく信心が大事で、こ

れを衆生に成就せずにはおかないと願われているのが(至心信楽の願)の思し召しでありましよう」

*

A 「ではなぜ、阿弥陀仏の大悲大悲のお心をいただかなければならないのでしょうか」

D 「それは阿弥陀仏が私たちが撰め取ってくださる恵みにあずかるためです」

A 「撰めとりたもう恵みとは撰取不捨の利益と言われているのですか」

D 「そうですね。阿弥陀仏は私たちにであい、私たちが撰め取って、救おうとされています。しかし、私たちはその恵みを受け取らないゆえに、私たちの上に救いが現実化しないのです。撰取不捨の働きは万人に働きかけていますが、それに気がつかず、それを受け入れていません。この広大な大悲大悲の撰取不捨の働きは(乃至十念・若くは正覚)と喚びかけ、大悲心を知らしめ与えようとされるのです。そこで念仏を称えつつ、この念仏に表されている大悲撰取の働きが(まことに我がためであった)と知られるとき、撰取不捨の恵みは大いなる利益となつて、私の上に実現するのです」

A 「大悲の親心を聞き受けるとき、阿弥陀仏の撰取のお助けが活性化するのですね」

D 「そうですね。たとえて言

えば、重病人の私に、極く親切で優れたお医者さんが、何年もかかって特効薬を作つて、私のところにもつてきて(これを飲みなさい、必ず直すから)と差し寄せてくれる。けれども私はそれほど重病人とも思わないし、また作つて持つてきてくれた親切なお医者さんを疑つて容易にその特効薬を飲まない。飲まないから、特効薬は手元にあれども薬効はない。しかし、自分がかの治療は難しい重病人であると知り、またそのお医者さんの親切心に動かされて、それじゃあ飲みましよう薬を飲むと薬が効いて楽になる。薬効が表れる。やがて病が治る。南無阿弥陀仏(薬)を称えてはいるが念仏をまだ信じていなければ(飲んでいない)のと同じ。だから南無阿弥陀仏の薬にこもる薬効(利益)は我が身に表れてこないのです」

A 「そうですね」

D 「そうですね」

A 「そうですね、誓いの念仏を信じることは極めて大事なことです。信じる信心によつて今の私たちの上に救いが実際に実現するのですから」

D 「ええ、それが現実的に助かるということなのです。ですから阿弥陀仏は、第十八願に衆生が誓いを信じる信心を誓われた

のです」

*

A 「なぜ信心まで誓われねばならないのですか。念仏の誓いを信じなさいと仰せられるだけではなかつたのではないですか」

D 「それは私たちに信心がないからです。私たちの側からは信心を起す力がありません」

A 「私たちが念仏往生の誓いを信じる信心を起すような心をもつていないのですね」

D 「ええ、こうした私たちの姿を法蔵菩薩はあらかじめ知り抜いて、本願を信じる信心まで用意し、これを私たちに与えて、本願を信じさせて救おうとされるのです。それで衆生に、(本當に疑いなく我が国に生まれるとおもうて念仏申すものを、もし生まれれば正覚を取らない)と誓われて、この願成就して阿弥陀仏になられたのです」

A 「お念仏もお念仏を信じる信心も、いわば行も信も成就して、これを私どもに回向して救おうとされているのですね」

D 「そうですね。阿弥陀仏は念仏のみならず信心までも私たちに与えて救おうと働きかけてくださっているのです」

A 「くりかえしますが、念仏の誓いを信じる信心までも与えて救おうとされるのが第十八願で、そのお心を(至心に信樂して我が国に生まれんとおもえ)とお示しくださっているのですね」

D 「ええ。それゆえ宗祖は第十

八願を至心信樂の願ともうされ
たのでありましよう」(了)

歎異抄 第一章第二講

弥陀の誓願不思議にたすけられまいら
せて、往生をばとぐるなりと信じて念仏
もうさんとおもいたつところのおこると
き、すなわち摂取不捨の利益にあずけし
めたまうなり。弥陀の本願には老少善悪
のひとをえらばれず。ただ信心を要とす
としるべし。そのゆえは、罪悪深重煩惱
熾盛の衆生をたすけんがための願にてま
します。しかれば本願を信ぜんには、他
の善も要にあらず、念仏にまさるべき善
なきゆえに。悪をもおそるべからず、弥
陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆ
えにと云々。
(歎異抄第一章より)

歎異抄は第一章の冒頭から「弥陀の誓願
不思議にたすけられまいらせて、往生を
ばとぐるなりと信じて念仏もうさん」と
いう風に始まり、私たちは弥陀の誓願不
思議に助けられる、これが真宗の救済だ
と、実にハッキリと示されているのです。

*

戒律を保って助かるのではない。座禅
を修して助かるのではない。多くの經典
を学び、意味を了解して助かるのでは
ない。一切は空であると悟って助かるの
ではない。もの皆因縁であると目覚めて助
かるのではない。すべてはただ心の描き
出したものにすぎないと自覚して助かる
のではない。自己存在の尊さに目覚めて
助かるのではない。我がいのちは本来仏
のいのちの外にないと知ることによって
助かるのではない。一切の現象は仏のな
さしめであると目覚めて助かるのではな

い。自己の心の内観を深めて助かるので
もない。自己の罪悪を自覚することによ
って助かるのではない。いのちに潜む深
い道理を直観して助かるのではない。大
自然の恵みを感じることによって助か
るのではないなど。

こういう救いによって救われる人はあ
ろうけれども、私ども親鸞聖人の教えを
いただくものは、ただ「弥陀の誓願不思
議にたすけていただく」ばかりであると
お聞かせいただくのであります。こんな
ことは今さら言う必要はないかもしれま
せんが、この点がハッキリしていないと、
「行に迷い信に惑い」(本典・総序)と
いうことになりかねません。

私たちは何を聞法しようとしているの
か、何を信じようとしているのか、どこ
に自らの救いを求めようとしているのか
は、真宗のお聖教に照らして考えてみる
ことが大切であります。お聖教は、私ど
もの聞法の正しい規範であり鏡でありま
す。お聖教を離れて聞法することは真宗
の聞法にはならないのであります。もち
ろん、真宗以外に救いは無いなどといっ
ているのではありません。

しかし少なくとも真宗に救いを求める
なら、真宗のお聖教を鏡として、自らの
聞法のあり方を反省し、正しい教法をお
聞かせいただかねばならないのでありま
す。

*

そこで、まず「弥陀の誓願不思議」と
は何かということ。これが明らかに
ならないと真宗全体が明らかにならない
のはいうまでもありません。

しかし、「弥陀の誓願」とは何なのか。
それをお聞きし、教義を頭では知ってい
ても、それが実感としてなかなか分から

ないので。分からないからついつい(自
分に分かるものを弥陀の誓願不思議とし
て理解しようとする)ことがあるのです。

こんなことをいうのは若い頃私自身が
そんなことを長い間していたからです。
真宗教義からは弥陀の本願は第十八願で
あり、ことに念仏往生の願であります。
けれどもそれを聞いてもピンとこない。
実感が無い。納得できないのであります。
それで自分に納得できるように弥陀の誓
願を受け取ろうとするのです。自分に納
得できるように解釈を施して、理屈にあ
うようにしてしまうのです。いろんな解
釈をして自分の知性にうなずけるように
弥陀の誓願を自分なりの解釈をするので
あります。

*

たとえば、私などは「ここでいう弥陀
誓願不思議というのは、要するに大自然
の不可思議な働きをいわれているのであ
る。広大ないのちの不思議な働き、それ
をここでは誓願不思議といい、その働き
に生かされていることに気がつくことを
信心というのだ」というように受け取っ
たこともありました。

また「私がどういう状態になろうとも、
私の一切の思いをこえて今ここに生きて
いる。今ここに私を生かしているいのち
の働き、それを弥陀の誓願というのだ。
この不思議によって今ここにあらしめら
れていること、そのことに目覚めること、
それを信心といい、目覚めての生活を往
生という」などと受け取っていたことも
ありました。

しかし、このように理解した弥陀の誓
願は、この歎異抄にお示しくくださる「弥
陀の誓願不思議」ではなかったのです。

*

この歎異抄でいう「弥陀の誓願不思議」
とは何か。それは歎異抄自身の中に示さ
れています。第一章に対応するとされて
いる第十一章に

誓願の不思議によりて、たもちやすく、
となえやすき名号を案じいだしたまい
て、この名号をとなえんものを、むかえ
とらんと、御約束あること
とあります。これが誓願不思議の内容で
あります。

「いや、そんなことは承知している。
ただ弥陀の本願の御約束を聞いてもピン
とこない。私は自分に分かる話が聞きた
い」と言われるかもしれませんが、聞法
とは自分に納得できるものは受け入れる
が、納得できないものは受け入れない
というように法を聞くのではなくて、自分
に納得できるかどうかよりも、弥陀の誓
願不思議とは何かを親鸞聖人や歎異抄は
どのように私たちに告げ知らせようとし
ているのか。如来聖人はどう仰せられる
のかを素直に心開いて耳を傾け続けるこ
とが大切であります。私がどう考え、ど
う思い、どう受け取るか、それはしばら
く置いて、如来聖人は私にどう仰せられ
ているのか。それを第一に聞くのであり
ます。大経に「謙敬して聞きて奉行し」
とありますように、へりくだり、敬いの
心をもって仏の言葉を聞くのでありま
す。そうすると分からなかった本願のお
心が次第に身に沁みてきます。

*

救いは私の思いや考えや了見からは来
ません。私に告げたまう仏の御言葉から
来るものです。救いは自己の内面からは
来ません。私にそがれる光明(仏の御
言葉)から来ます。(了)

【初めての韓国2】

(1990年8月1日から4日まで)

通度寺(トンドサ)を出て、慶州行きのバスを調べたが分からない。近くの老人に尋ねると、ここから慶州行きのバスは出ていないという。さあどうしたらいいかと思ひ、その場に突っ立っていると、その老人が近くの4トントラックの運転手に何か話しかけている。そして私のところに来て、「あのトラックが慶州方面に行くから乗せてもらいなさい」と親切に言ってくれた。とても困っていたので本当に嬉しかった。トラックの運転手の若者は「しかたない」という風であったが、私はここで遠慮してはどうにもならないと思ひ、相手の迷惑はこの際勘弁してもらひ、乗せていただいた。二時間ほどで慶州市に着き、お礼を言っておろしてもらった。旅行するということは多くの親切をもらひ、多くの人に迷惑をかけることでもある。そこからタクシーを拾ひ、国立の慶州博物館に行った。ここで目立ったのは日本の飛鳥、奈良時代の装飾品と非常によく似た装飾品が多数展示されていたことと、エミレの鐘である。エミレの鐘の悲話は節談説教(テープ)で聞いて感動したことがある。街の中の小さな韓国式旅館に泊まった。日本人や外人の若者が数人泊まっていた。夜食のため外に出て食堂に入るが、なにせ仏教僧の姿なものだから、韓国僧は肉食は原則的にできないと聞いていたので、土地の人の僧侶に対するイメージを傷つけるわけにいかず、私自身は焼肉を食べたかったがやむなく麺類を注文した。宿に帰ると旅館の主人が日本語で話しかけてきて居間の中に通された。何の話があるのかと思っていたら盛んに自分の信奉する新興宗教の宣伝を始めた。いやいやながらしばらく聞かされる羽目になった。翌日、仏国寺(ブルクサ)にお参りする。ここも拝観料は取られなかった。寺の創建は6世紀から始まるとのこと。寺内には国宝として有名な石橋や石塔があつてこれも1200年も前のもの

で優美である。ただ仏国寺は1593年に秀吉軍の侵略により、木造の建造物はすべて焼失した歴史がある。ここにも日本による朝鮮半島への侵略の傷が刻み込まれている。日本民族が朝鮮半島に侵略的行為をしたのはめぼしいところで三度ほどあるが、朝鮮民族が日本に侵略したことは一度もない。日韓・日朝関係の間には、傷つけられたものと傷つけたものとの感情的落差を理解しておかねばならないと思う。さて仏国寺の中はこじんまりとして美しく落ち着いている。日本人観光客も多く、ガイドさんの説明を傍聴していると、韓国の仏教徒はキリスト教徒よりも多いとの説明であつたが、すくなくとも現在はキリスト教徒の方が多い。李王朝時代、仏教は弾圧され、寺院は街の中に建てることはできなかつたようで、寺は郊外や奥深い山の中に建てざるを得なかつたと聞く。李朝崩壊前からキリスト教は浸透していったが、特に朝鮮戦争以後、アメリカの政策的後押しもあつて、急速にキリスト教が広まつた。アメリカは韓国をキリスト教化し、またそれによつて共産主義の浸透を阻止しようともくろみがあつたようだ。それで現在キリスト教徒は韓国人口の三分の一ほどになつたと聞く。仏国寺の参拝を終えて、韓国人が世界最高と誇る仏像がある石窟庵に行こうとしたが、残念なことに最近の台風で石窟庵への道が通れなくなつて行けないとのことだつた。やむなく寺の前で座っていると、若い女性が日本語で話しかけてきた。大学で日本語を勉強しているということだつた。仏国寺から宿にかえるまで案内してくれた。韓国へ来て土地の人たちからいろいろ親切にしていたのだが、親切をどこまで受けていけばいいかやや戸惑う。次の朝早く、慶州駅から鉄道で大邱(テグ)に行く。駅に降りて構内を歩いていると売店で巻き寿司を売つていたので、これはいいと早速いただく。大邱駅前のバス停から次の目的地の海印寺にバスで向かつた。

(続)

仏に遇あうまで

⑫